

第27回

素晴らしきオペラの世界 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（5）～

学習のねらい

クラシック音楽といえば、管弦楽を駆使した「交響曲」、そして声楽を伴った音楽劇である「オペラ」という2つをその筆頭にあげることができるでしょう。オペラには言葉の壁があり、なじみにくい部分もありますが、一方で、物語にそって音楽が展開してゆくという点では、むしろわかりやすい面もあります。今回はオペラの誕生の経緯、オペラの種類、そして代表的なアリアを聴きながらこの重要ジャンルについてじっくりと学んでいきましょう。



講師
沼野雄司

オペラというジャンルの誕生について知る

オペラの源流をさかのぼると、いわゆる「ギリシア悲劇」にたどりつきます。古代のギリシアでは合唱を伴った音楽劇が盛んに上演されていたのですが、しかし楽譜が残されていないために、具体的にはどのような音楽が用いられていたのかはよくわかっていません。この古代の芸術伝統を復活させようとして、イタリアの知識人たちが1600年前後につくり上げたのが「オペラ」というジャンルです。

この新しい芸術の形においては「音楽」と「劇」を融合させるために、声楽部分は大きく2つの側面を持つことになりました。1つは「アリア」とよばれる、まさに歌の部分です。オペラというと、こうした歌の部分だけで構成されているようにも思われがちですが、しかし一方で、これだけでは物語を迅速に進めてゆくことができません。そこでもう1つ「レチタティーヴォ」と呼ばれる、語りに近い歌唱が用いられることになりました（少しばかり、現代の「ラップ・ミュージック」にも似ています）。このレチタティーヴォとアリア、そして管弦楽による部分が連続して、1つの音楽劇をつくり上げてゆくのです。

オペラのさまざまなタイプについて理解を深める

演劇に、喜劇や悲劇をはじめとしたさまざまなタイプがあるように、オペラもその歴史の中でさまざまな性格のものが生み出されることになりました。中でもモーツァルトの「フィガロの結婚」やロッシーニの「セビリヤの理髪師」などに代表される「オペラ・ブッフア」は、当時、大変な人気を博した喜劇オペラです。こうしたオペラではたいていは主人公をめぐるドタバタ劇が展開しますが、それに合わせて音楽も軽快で機転が利いたものが要求されます。

一方、重厚なオペラの代表といえばワーグナーの作品でしょう。彼の後期のオペラは、多くは神話を題材にしたもので、作曲者自身の台本による4時間以上もかかる大作がほとんどです。そのスケールの大きさもあって、しばしば彼の作品は「楽劇」と呼ばれて、オペラの中でも特異な存在として知られています。

モンテヴェルディからプッチーニにいたるオペラ作品を体験する

オペラの歴史をたどるときに、その開始当初に決定的な貢献を成したのが、イタリアのモンテヴェルディです。

彼がギリシア神話を題材にして書いた「オルフェオ」(1607)は、管弦楽の大胆な用法や精緻な声楽の技巧によって、このジャンルを一気に成熟させることになった傑作といえるでしょう。その後、17世紀から18世紀にかけてアレサンドロ・スカッラッティ、リュリ、ヘンデル、モーツァルトなどの作曲家が活躍し、19世紀のロッシーニやドニゼッティへとオペラの歴史をつないでゆきました。そして、19世紀にあらわれたオペラの巨匠といえばヴェルディです。

彼は何よりも大きな物語を圧縮して、劇的な展開をつくることに長けた作曲家でした。彼の作品では、登場人物の感情が一瞬のうちに変化し、そしてほかの登場人物の思いと交錯しながら、複雑な様相を呈してゆく様子がリアルに描かれます。また、20世紀初頭には、ワーグナーの語法を受け継いだドイツのリヒャルト・シュトラウスなどが活躍しました。そしてやはり20世紀初頭、オペラの華ともいえる名アリアを数多く書いたことで知られるのが、イタリアのプッチーニです。彼はその甘く、やるせない旋律によって、現在にいたるまで世界中で最も人気の高いオペラ作曲家のひとりとなっています。